極楽通信

UBUD Vol.26

photo:Y. Hori

いつも不思議に思うのだが、UBUDは日本の真夏の東京などと比べるとずいぶん過ごしやすい。日陰にいれば大抵は涼しい風が吹いてくる。湿度もなぜだか東京ほど感じない。エアコンがなくても快適に過ごせるのである。昔は日本でもこんな感じだったような気もする。

ということは、都市熱を発生させるアスファルトやコンクリートに囲まれた環境が原因かもしれない。発熱源は増えるばかりである。どんどん都会の夏は過ごしにくくなる。

UBUDでぼーっと空を見ていると、結構なスピードで雲が流れているのに気づくことがある。常に空気が動いている。自然の中を通り過ぎる風は適度に冷やされて心地よい。乾期の夜ともなれば寒いくらいに冷える。その頃の東京は熱帯でもないのに熱帯夜が続くというのに。これでは地球温暖化というよりも都会温暖化と言った方が正解かもしれない、などとも思ったりする。

そんなわけで私は東京の夏の蒸し暑さが大変苦手だが、UBUDの暑さは快適だと感じるのである。

堀　祐一

Contents

● Kabar Baru Berita Lama
オダラン体験 ---------- 4
● Wariga ／バリの暦大解剖！
第一弾「Sasih」---------- 5
● Profil ／人物紹介
I Made Sija ---------- 6
● Perawatan Anak【7】
正しい出産と育児 in Bali-7---------- 8
● Pin-Pin-Boh/6
インドネシア語講座／ 6 ---------- 11
● Help Wanted/2
バリで働きたいあなたへ…／ 2 ---------- 12
● Snap
はみだしスナップ ---------- 14
● Buku-Buku 紹介
地球の歩き方「バリ島」個人マニュアル ---------- 15
● Bali Buku Catatan Harian/4
バリ日記【4】---------- 16
● TOKO　BEST 店
LINGSIR---------- 22
● Warung　味な店
Dewangga Warung ---------- 22
● Pondok Manis 私の常宿
Hai Home Stay ---------- 23
● Pesan & Kesan
旅人一声 ---------- 23
● Berita Terbaru
その他のニュース ---------- 24
● Orang-orang Ubud/26
うぶっな人々／ 26 ---------- 25
● O-Shi-Ra-Se
おしらせ ---------- 26
● Pengumumaan
でんごんばん ---------- 26

○表紙のことば○

編集室便り

●入稿に関するお願い

編集部では、Macintosh による DTP 作業で版下を作成しています。原稿をお寄せくださる方で Text Data で入稿可能な方は、以下の方法でお願いします。

□ Macintosh format または Windows format の FD (Text Data)
□ E-Mail :
MHC03202: 菅原 (NiftyServe)
GCB01162: 堀　(NiftyServe)
hori@potomak.com (Internet)
eriko@potomak.com (Internet)

※詳細は、裏表紙にある日本連絡先事務所までお問い合わせくださ

特派員報告 オダラン体験

By TAKA-Chang

雲に見え隠れした満月がクリーミーに辺りを照らす。噴煙を上げるバトゥール山が、闇の中に黒々と浮かび上がっている。周囲は、溶岩が冷えて固まってできたごつごつとした岩に囲まれていて、満月にその黒さを際立たせている。月の世界にでも迷い込んだかのように静か。ガタガタ道を走る、私達を乗せた車の音だけが響きわたっている。そんな中、時折通りすぎる小さな集落にほっとしながらも、「本当にたどりつけるのか?!」と不安に思い始めた頃、行く先に灯りが見えた。今回の目的地、Pura Bukit Mentik である。

このお寺も、これまた黒い岩で出来ている。そしてそれは周りの景色と絶妙に調和している。向こうにそびえ立つバトゥール山、たちこめるお香のかおり、冷たい空気、そして満月の光…全てがあまりにも心地よい。そんな中でのお祈りは最高に気持ちよかった。いつにもまして神聖な気分であった。辺境にあるせいか人が少なく、いるのはおじさんとおばさん、そして子供達ばかり。若者の姿はほとんど見かけなかった。ここまでやってくる日本人が珍しいのか、みんな声をかけてくる。特に子供達は、好奇心いっぱい笑顔いっぱいで話しかけてきた。「どこから来たの？」「名前はなんていうの？」「バリでは何んて呼ばれてるの？」いままで行ったオダランでは、こんなふうに声をかけられることはほとんどなかった。とてもアットホームな感じ。一緒に楽しもうよ！と、仲間にいれてもらえているような気がして、なんだか嬉しい。…すっかり囲まれて質問ぜめにあっているうち、踊りが始まった。この日の催物は、とある日本人とバリ人の二人でのトペン・ダンスと、ボナ村の有名なダラン、Sija さんのワヤン・クリであった。Sija さんは毎年この寺にワヤン・クリを奉納しに来るのだそうだ。車で 1 時間以上もかかる遠いこのお寺まで来るというのは、やはり、この場所が気に入っているからかもしれない。街のオダランのように、たくさんの人がいるわけではなく、もちろん観光客もほとんどいない。とくに舞台が設けられているわけでもなく、ほんのいくつかのランプと月あかりだけの薄暗い中での芸能は、とても雰囲気のあるものだった。楽しそうに喜んで見ているみんなのなごやかな様子もプラスして、私も十分楽しませてもらった。ふと気が付いて時計を見ると、もう深夜 12 時をまわっていた。どこから持ってきたのか毛布などを掛けて寝ている村人達もいる。こんなに静かで、こんなにのんびりとしたオダランは初めてである。昔はみんなこんなふうだったのかなあ、とふと思う。街でのオダランしか知らなかった私にとって、軽いカルチャーショックであった。

すっかり深夜になってしまったその帰りぎわ、もういちどお寺の奥を振り返って見た。バトゥール山を背負ったお寺のシルエットが月に照らされて、それはそれは神秘的に浮かび上がっている。まるで月に祝福されているかの様。別世界のようなこの場所に、もうひとつのバリを見つけたような気がして、すっかり満たされた気持ちで家路へとついたのであった。

バリの暦（カレンダー）大解剖！
第一弾「Sasih」

みなさん市販のバリのカレンダーを見たことがありますか？日にち以外にずいぶんたくさんの単語が、これでもか、となにやら書き込まれ、「いったいコレは何を意味しているの？」と疑問に思った方も多いことでしょう。そこで極通ではこのナゾ多いバリ・カレンダーの解剖をしてみちゃおうというわけです。今回は中でもSaka（サコ）暦という、月の満ち欠けを基準にした暦に焦点をあててみましょう。

まず、バリ・カレンダーの日にちの小さな四角いスペースを見てみて下さい。そのいちばん下のところに、「Sasih ○○○」と書かれていますね。Sasihとは月を意味するバリ語です。ペジェンにある有名なプラ「Penataran Sasih」も月の御所という意味でそこには欠けたお月さまの一部がゴングになって残っているといわれています。普通、空に見える月のことは「Bulan」とも言いますが、「Sasih」は特に暦を言う時に使われているようです。○○月の「月」が、「Sasih」と呼ばれるわけです。

普通の太陽暦の一般のカレンダーには月が12ありますね。バリのサコ暦も12ですが、それは太陽暦と同じように1月から第一番めのサシーが始まるわけではありません。太陽暦のいつ頃から一番めのサシーが始まるかというと、これは毎年違うのではっきり言えませんが、だいたい太陽暦の6月頃だと言われています。ではここで、12あるサシーと今年の太陽暦がいつのサシーにあたるのかご紹介してみましょう。

(1) Sasih Kasa（カソ）
第一月／6月26日～7月24日
(2) 〃 Karo（カロ）
第二月／7月25日～8月23日
(3) 〃 Katiga（カティガ）
第三月／8月24日～9月21日
(4) 〃 Kapat（カパッ）
第四月／9月22日～10月21日
(5) 〃 Kalima（カリモ）
第五月／10月22日～11月19日
(6) 〃 Kanam（カナム）
第六月／11月20日～12月19日
(7) 〃 Kapitu（カピトゥ）
第七月／12月20日～来年はまだ不明
(8) 〃 Kaulu（カウル）
第八月／一月下旬～
(9) 〃 Kasanga（カサンゴー）
第九月／二月下旬～
(10) 〃 Kadasa（カダソー）
第十月／三月下旬～
(11) 〃 Jiyestha または
〃 Desta（デスト）
第十一月／四月下旬～
(12) 〃 Sadha（サドー）
第十二月／五月下旬～

それぞれのサシーの変わり目は、必ず新月の翌日となっています。そして毎年、第十番目の月Sasih Kadasaの第一日目が、皆さんもよくご存じの“ニュピ”にあたります。サコ暦では第一月の初日が新年ではなく、このSasih Kadasaの初日、つまりニュピが新年として祝われます。…と言っても日本のお正月のような行事はなく、ニュピの一連の儀式があるだけです。ちなみに今年のニュピは、3月29日で、サカ暦1920年の新年を迎えました。

さて、バリの人々は季節の移り変りを、太陽暦の月ではなく、Sasihをもとにしてよく言い表わします。たとえば、

◇Sasih Karoは寒くなり始める、そしてよくガーベンが行なわれる。
◇Sasih Katigaは空気が乾燥して風が強い。凧あげの季節。
◇Sasih Kapatは花が咲く季節、気候は涼しい。
◇Sasih Kalimaは雨があまり降らず、ランブータン、マンゴーのおいしい季節。
◇Sasih Kanamからは本格的な雨季。
◇Sasih Kapitu,Sasih Kauluは雨、嵐が来る。
◇Sasih Kasangaは雨がやみはじめ、暑い。
◇Sasih Kadasaは稲の収穫によい季節。
◇Sasih Desta,Sasih Sadhaは田植えによい季節。

…といった具合です。

皆さんも、バリに来てバリの人々とおしゃべりする時、こんなSasihの風物詩を会話の中に入れてみては？「いやあ、昨夜の雨はすごかったね。」「うん、そろそろSasih Kapituだからね。」なんていうふうに。きっとそれを聞いたバリ人は、「おっ、こいつ知ってるな。」なんて思うでしょう。バリには雨季と乾期しかないと思っていたら、バリの人達はこんなに細かにSasihに基づいてそれぞれの季節を感じとっているのですね。

さあ、次回のバリ・カレンダー解剖は何をテーマに書こうかと考えているところです。楽しみにしていて下さい。

Profil ／人物紹介

I Made Sija

久しぶりの人物紹介。セニマンとはインドネシア語、バリ語でアーティストのこと。それが職業として成り立っているかどうかは別として、とにかく芸術にたずさわる人で、特にその道で名の通った人のことをいう。それは賞賛の言葉でもある。今回はそのセニマン中のセニマンである、ボナ村のシジョー氏を紹介しよう。

I Made Sija。シジョー氏はスーパー・セニマンである。その活躍は影絵芝居のダラン、仮面（トペン）舞踊の演者、トペンの彫刻師、ウンダギ（バリ伝統建築のプロ）、そしてオダランの時のプラの飾りものをつくる名人と、あらゆる方面に及び、そのどれもが優れているのである。シジョー氏はプラへのンガヤ（ご奉仕）で踊ったり、また供物づくりに行ったりするのは喜んで参加する。たとえそれが無償であっても。しかし、少しでも気に入らない人から頼まれたら、どんなに金を積まれても断るのだという。以下は、インタビューで、彼自信が語ってくれたものである。

■Sija氏といえば、ダランとして一番有名だとよく聞きますが…。

「わしはダランと呼ばれるのはどうも苦手だね。なぜかって？そりゃあひとたび一人前のダランとなったからには、あらゆる分野にたけていなきゃあならん。そして何かと自制せにゃならんこともたくさんあるのだよ。そう、ダランはアーティストである前に、宗教的にも、道徳的にも、民衆の前では師とならねばならんのだ。そういうカタ苦しいことはわしゃあどうも性にあわん。」

■ワヤンを演じる時の心構えみたいなものは？

「ワヤンを演るのは好きだよ。今のこの時代に、昔と同じことをしとっては観衆が飽きる。わしは演る前に、その場の状況をまず読むことにしとる。たとえば若い人や子供達がたくさんいたら、カウィ語（古代サンスクリット語を基にした古典言語。ワヤンには必ず使われる）をしゃべるのを減らして普通のバリ語を多くする。他にも観る者を喜ばせる方法はいくらだってある。そうでもしないと、この時代、芸能は生き残っていけんよ。」

■ダランの勉強はどんなふうになさったのですか？

「ダランの勉強はな、わしは自分でカウィ語の本を読んで学んだのが最初だ。若い頃、日本軍のとりしきっとる学校に行くのがイヤでね、日本の歌だけは今でもいくつか覚えとるなあ。…部隊訓練といって、ヤリ攻撃の練習をするのがイヤでイヤで、仮病を使って家に閉じこもって本を読んでばかりいた。それが、今考えると、ダランになるための基礎を学んだことになるわけだ。」

■今でもよくンガヤをなさるのですか？

「ワヤンにしろトペンにしろ、プラへンガヤしに行くのが、わしの天職だと思っとる。ンガヤを頼まれれば病気だって治ってしまうくらいだ。それが今、もう60歳にもなるとなかなかしんどくてな。だんだん息子や弟子たちにチャンスを譲るようになった。」

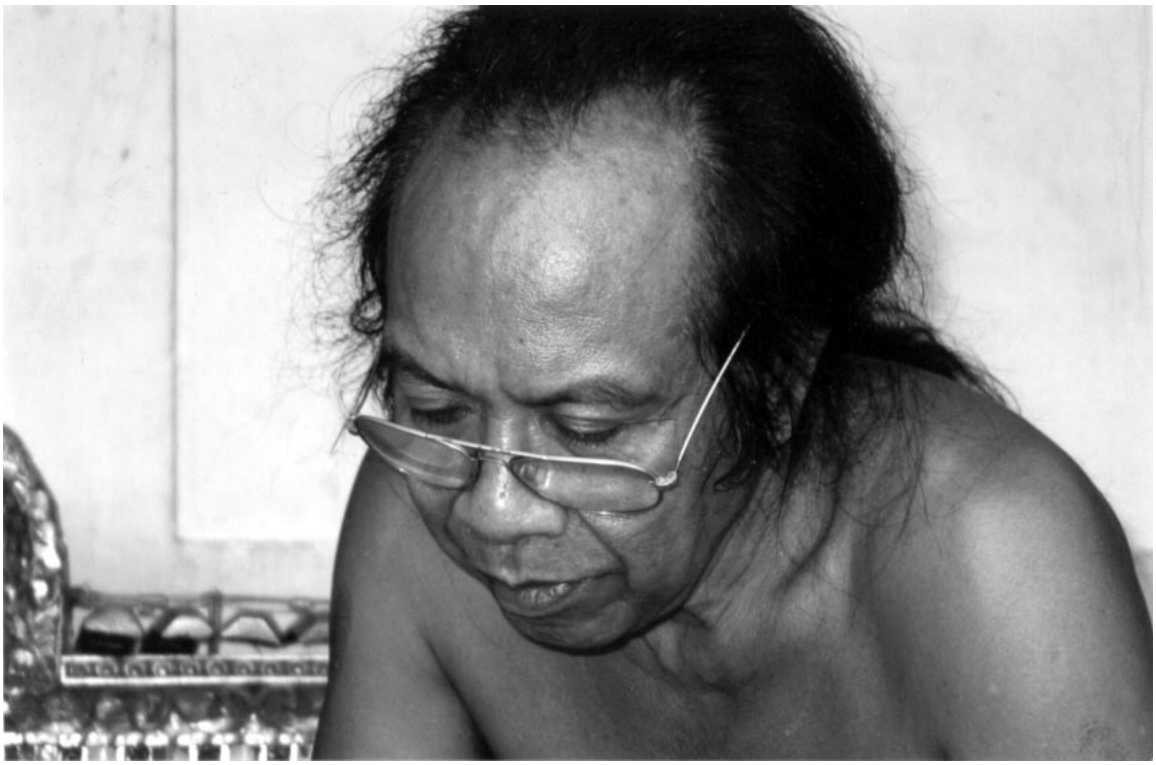
■Sija氏から見た今の若いアーティストは？

「今の若い人達は踊りを知らんのが多いなあ。レゴンだって、クンダンの音とちっとも合っとらんのに、大勢の観客の前で平然と踊っとる。そういうのを見るとわしは頭が痛くなるのであんまり見んようにしとる。トペン・トゥオにしても、なんで皆あんなノミを取る仕草や、ヨボヨボ歩きなんてするようになったんだ？！

トペンのタプル（面）は翁だぞ、老いた王様だぞ、病気の老人はひっこんどればいい。舞台に出てくるな！！　ワッハッハ」

■ダランやトペンの他に、何かお好きな踊りなどありますか？

「舞台で自分の好きなテーマを、自分の好きなように踊るのは楽しいね。昔、スウェーデンだったかなあ、世界中から芸人が集まって、ひとり舞台をする、なんじゃ、パントマイムというんか、それをしたことがある。他のやつらは皆たいそうな小道具を持ってきよったが、わしはカマン（布）一枚で舞台に上がったんだ。象になってみたり、そのへんのものをたたいて音を出してみたり、そりゃあ楽しかった。どんなふうにしたら観客が笑ってくれるか、考えるのが好きなんじゃ。その点じゃワヤンもトペンも同じだなあ。」



■現在、積極的になさっている活動は？

「今、うちにはサンガールがある。Pari Purna（パリ・プルノ）という名前だが、ホテルに出前に行ったりはしない。もっぱらこの辺りの、貧しくて飯が腹いっぱい喰えん子供とか、学校を卒業できんかった子達を集めて、面を彫ったり踊りを教えたりしとる。ガイドと組んでビジネスみたいな公演をするのはイヤだね。ここにはかろうじてガムランが一式あるが、いつもSTSIの子らが借りにきよる。卒業制作のためには自分でガムランを都合せんといかんのに、金持ちに限って自分の金ピカのガムランを他人に貸したがらん。いったいどうなっているのだろうね。」

■今のSija氏にとって一番大切なものは？

「わしは自慢じゃないが、金はないぞ。家もこのとおりボロボロだし、でもな、わしには子供や孫達、それに「お父さん」と呼んでくれる弟子たちが山のようにいる。これほどすばらしい財産はない。わしの踊りなんかも、みんなこの子たちが引き継いでいってくれたら、セニマンとしてこんな幸せなことはない。そうだろう？！金はすぐなくなるが、この財産は残っていくものだからね。」

気難しい人だと聞いて、極通スタッフは少々緊張気味にSija氏の家を訪ねた。事前にアポイントをとった電話でも、どこかつっけんどんな話し方で正直言ってビビっていたのである。ところが実際会ってみると、Sija氏は非常に気さくで温かい人柄の“オヤジさん”という感じであった。会って自己紹介をするかしないかのうちにさっそく「おい、ちょっとコレを飲んでみろ。」と生薬をつけ込んだアラックを飲まされて（っと失礼！ごちそうになって）いきなりその場が和んだのであった。外国人には決して名の知られていないセニマンだが、バリ人の若いセニマンからは「Seniman Alam（自然の、生粋のセニマン）」と言われてたいへん尊敬されている。

後日、極通スタッフはSija氏のワヤン・クリッを観る機会があった。それはとても68歳とは思えないほどエネルギッシュでスピーディー、そして魅力的なワヤン・クリッであった。彼の息子達も、UBUDやデンパサールですばらしい踊り手として名が知られはじめている。極通スタッフは、こんなSeniman達を、心から応援したいと思っている。

正しい出産と育児 in BALI

by ムーン・ストーンの花嫁

NOMOR 7

■ありがたやベビー枕セット

手術の傷の痛みがあまり和らがないまま、退院を迎えることになった。たったの３泊４日の入院であった。日本の病院のようにちゃーんとケアしてくれるのであれば「もっとここにいさせてェー」と懇願したであろうが、こんな看護といえない看護じゃあぐずぐず長居したってしょうがない。夫も家族も「Tidak apa apa ぁ〜、家の方が落ち着けるよ」と言うのだが、それは自分たちがそうだからであろう。身仕度を整えていると看護婦のひとりがやってきて、「これは病院からです。おうちで使ってくださいね。」と言って赤ちゃん用のミニ枕セットを置いていった。インドネシアでは大人も子供も寝る時、抱き枕というのを使う。インドネシア語で Bantal Guling（バンタル・グリン）、バリ語では Galeng Guling（ガラン・グリン）である。Gulingとは「転がる」を意味する言葉で、その名のとおり直径約20cm、長さ1m 弱の円筒形をしているクッションである。中身は普通の枕と同じような綿詰めである。これをどうやって使うかというと、横向きに寝た時、上になった手と足をこのバンタル・グリンに抱きつかせるように置くと、これがたいへん具合がよろしいのだ。無理のない、自然なかたちで眠れ、暑くて寝苦しい夜なんかもベタベタせずに結構気持ちがいい。これを抱いて眠ると特にひとりで寝る時なんか妙に安心感まで得られる。オランダの植民地時代、オランダ兵達はここで籐（ラタン）で編んだバンタル・グリンを愛用していたという。いかにも涼しそうである。小さな寝床に３人も４人も連なって寝ることが多いバリ人だが、そんな時は誰かしらがこのバンタル・グリンの代用になって、となりのヤツの重い足を乗せて眠るはめになる。以前４人のバリ人の男の子達が互いに手や足をのせ、そしてのせられ、あるいは手足をからめつかせて寝ている様を見たことがあるが、なんとなくホモチックでいけないモノを見たような気持ちになって、思わず目をそらせてしまった。

Illust:Fumio

話がずいぶん横道にそれたが、このベビー枕セットというのも、赤ちゃん用の小さな長方形の枕に、これまた小さなバンタル・グリン２本がセットになったものだった。新生児はもちろんまだ寝返りなんてしないから、本当はそんなもの必要ないのだが、Baby を寝かせたその両脇に、1本ずつ置いておくのである。まあ、一応これで囲っておけば安心、みたいな感じなのだろう。それを、病院側がプレゼントしてくれたのである。（…とその時は思ったのだ）正直言ってたいした金額のものではないし、もうすでにひと組買って使っているので別に踊っちゃうほど喜ぶわけでもなかったが、初めて病院側の“暖かい思いやり”が感じられて嬉しく、素直に「Aduh 〜、テリマカシ・バニャッ!!」とその看護婦にお礼を言った。それが…である。退院準備がすっかり整った頃に、受付で支払いを済ませてきた夫が、「覚悟はしていたけど…、高いなあ、やっぱりここは。」とぶつぶつ言いながら部屋に入ってきた。「そう？でもそのくらいが相場だって私は聞いてたわよ。」と夫から手渡された支払い明細書を何気なく見ていた私は、そこに、「ベビー枕セット・○○○○ルピア」と書かれているのを見つけたのだった。思い出してみると、そ

ういえばhadiah（プレゼント）とかgratis（無料）とはあの看護婦は確かに一言も言わなかった。何となくいっぱい喰わされたような気分になり、ますます「もう二度とこの病院には来るもんか」と心に決めたのであった。その病院の名誉のために一言書き添えておくが、ここに入院した人すべてが私のような印象をもったわけでは決してないし、バリの病院がすべてこのような状況であるわけでもない。誤解しないでもらいたい。…というわけで、あまりにもガックリして病院側に苦情を申し立てる気にもならず、その枕セットはありがたく（？）家に持ち帰るハメになったのである。

■強烈!!　親族のお見舞い攻撃！

さあ、いよいよ退院。インドネシア政府のVIPよろしく、ものものしく親族十数名を乗せた3台の車を連ね、私は夫の家に帰還した。そこに待ち構えていたものは、さらに十数名の親族プラスその子供達であった。バリの親族というものは、家によって多少違うかもしれないが、とにかくよく集まる。ウパチャラの時はもちろんのこと、何かちょっとしたこと、例えば誰かがバイクで軽い事故をしたとか、空き巣にテレビを盗まれたとか、病気で少し長く寝込んでいるとか、ジョグジャなんかに踊りの公演に出発する（ウチの親族には踊り手が多い）とか、なにかとしょっちゅう集まっている。それもハンパな数ではない。数えあげるとそれは数十人にも及ぶ。そういう時には必ずチビ達がついてくるから、もうにぎやかどころではない。もうやたらやかましくてうるさいのである。私は特に「まだこの辺ではめずらしい日本人の嫁」であったので、その赤ん坊見たさに、まあ、よくこんなにも、というくらい集まっていただいたわけである。「新生児のうちはまだとてもデリケートです。静かな環境をつくってあげましょう」と書いてある日本の育児書なんて参考にしようにもこんな状態ではムリだ。出の悪いおっぱいをいっしょうけんめいあげて、足りずにミルクを飲ませ、抱っこしてユリユリしてやっと寝てくれたBabyも、この親族のチビ達のお見舞い攻撃にはひとたまりもなく、せいいっぱい泣いて抵抗するしかなかった。昼夜かまわず2～3時間おきに授乳しなければならないので、極度の睡眠不足におちいっていた私まで泣きたくなる程であった。

■近くて遠いトイレ

もうひとつ、家に帰ってきて苦労したのはトイレである。手術以来、なぜか異常に瀕尿になった。さっきトイレしたばかりなのに、というくらいの近さでまた行きたくなるのだ。出る量はほんの少しなのだが、ひとたび尿意をもよおすと、もう一刻も早くトイレに駆け込まねばならないくらい、我慢できないのである。駆け込めればいいのだが、まだ傷の痛みが強く、ゆーっくりゆーっくりよちよち歩きしかできない私はもう必死である。部屋から台所のむこうのトイレまでは約15mほどの距離だ。そこを脂汗をかきかき、歯をくいしばりながら尿意と戦うのは非常につらいものであった。その時の私の様子があまりにも悲壮だったのだろう、お義母さんは「あのね、小さいバケツをひとつ買ってね、部屋のベッドの下にでも置いとけばいいのよ」と言うのだが、ちょっとそれは私にはできそうもない。そこで「ダドン（おばあちゃん）みたいにそのへんのすみっこでしちゃえばいいじゃない」とお義姉さんがアドバイスしてくれた。

昔のバリの女性は、パンツをはいていなかった。「あれは最近になってみんなはくようにになったのよ」とお義母さんが言っていたが、カマン（サルン）の下にひざ丈くらいの長さの布をもう一枚巻いて、それが要するに下着だったのだそうだ。だから、昔の女性（要するに今のおばちゃんとか、おばあちゃん）は足を少し広げて立ち、そのままおしっこをする。昔はまだ井戸もめずらしく、マンディや台所で使う水汲みは近くの川でしていたということを考えると、私が思うに、その頃は家々にはちゃんとしたトイレなどなかったのではないか。もちろん、ピカピカの陶器でできた便器が出回ったのもここ何十年のことに違いない。

…で、私に、おばあちゃんのするようにそのへんで立っ

てしろ、というわけだ。申し訳ないが、それも私にはできそうもない。このまま一生これが治らなかったらどうしよう、社会復帰できないのではないか、と心配だったが、1ヵ月後くらいからだんだんと治っていき、本当によかったと思っている。

■おっぱい不足には、カチャンとロロー責め

相も変らず私のおっぱいは出が悪かった。日本の育児書を読むと、「誰でも最初から順調におっぱいが出るとは限りません。精神的に悩んだり、寝不足が続くとますます出なくなります。気分を落ち着かせて、おっぱいマッサージを続けましょう」と書いてある。今の私はおおいに悩み、おおいに寝不足で、なおかつぜんぜん気分は落ち着かない。こんなんじゃダメだ、とあせればあせるほど悪循環に陥ってしまう。そんな私を待ち受けていたのはカチャンとロロー責めであった。カチャンは豆、特に母乳不足のお母さんはカチャン・タナ（落花生＝ピーナツ）を食べるとよろしいらしい。インドネシア産のピーナツは日本のものより小粒で味が濃く、弱火でこんがり揚げると香ばしくて非常においしい。コーヒーやビールのおつまみにぴったりだし、ごはんのおかずにしてもイケる。ひとつ、またひとつ、とつまみ始めると、やめられない、とまらない、なのだ。…が、いくらなんでも皿に山盛りのピーナツをいきなり全部食え、と言われると、見ただけで胸やけがするものだ。手のひらひと盛りくらいはなんとか入るが、それからは口の中で懸命にガリガリゴリゴリ噛んでも、いっこうにノドを通ってくれないのである。昨日のピーナツがまだ半分以上残っているのに、また今日も夫が買ってくる。「おい、今日のはKacang Rahayu（市販のいりピーナツ。値段は高いがおいしい）だぞ。なんだ、昨日のヤツちっとも減ってないじゃないか！
おっ、おい、なんだよいきなり泣きだして…おいおい、なんで泣くんだよ、ヘンなヤツだな」 そう思ったら一度自分で毎日皿に山盛りのピーナツ食べてみろってんだ。グゾーッ!!かくして、私のベッドのそばの小さなテーブルには、常に山盛りのピーナツがあったのである。そしてロローとは、インドネシアでは一般にジャムーと呼ばれる生薬のことである。バリでロローというと、薬草や香辛料をつぶしたり煮出したりしてつくる、飲み薬タイプが多い。私のためにお義母さんが作ってくれたロローは、バヤムという鉄分の多い野菜の根とナマのコメを石うすでつぶし、ジョッキ一杯の水にといたものであった。生臭くて舌触りがザラザラして、お世辞にもおいしいとは言えないそのシロモノを、一気に飲め、と言うのである。それもジョッキ一杯だ。それも朝ご飯の前に、である。飲みはじめて三日目くらいだっただろうか。あまりのまずさに、目を白黒させながら飲みほしたその瞬間、なんだか胃が喉元まで上がってくるような感じがしたと思ったら、今飲んだロローがいきおいよく全部口から逆流してしまったのである。ちょうど運悪くその場に居合わせていたのは、親族の中でもいちばん辛口の、ちょっときつい話し方をするイウォ（おばさん）であった。無言＆無表情で私がロローをもどす姿を見ていたイウォは、私が落ち着きを取り戻すのを待ってから、こうやさしく言ったのだった。「あらあら、そんなにまずかったのね」 そして台所にいるお義母さんに大声で叫んだ。「おーい、この子にもう一杯作ってやっておくれ」……。

今思い出してもこのカチャンとロロー責めはまさに拷問であった。それで肝心のおっぱいは…？　悲しいが効き目はほとんどなかったと思う。2～3時間ごとの授乳のあとには、相変わらず哺乳ビンでミルクを足さなければならなかった。一本しか買っていない哺乳ビンを、深夜だろうが何だろうがそのたびにいちいち洗って、熱湯消毒するのは夫の役目であった。ビンを専用のタワシでシャカシャカ洗いながら、夫はこう考えていたに違いない。「まだまだカチャンが足りないようだ、もっともっと食わせないと…」 この頃の栄養過剰（ピーナツはすごい高カロリーなのだ）は、今でもしっかり贅肉になって私の腹についている。母はやっぱりふくよかでなければ…と、自分で自分をなぐさめて（？）いた、ちょっと悲しくて、ちょっと笑っちゃう子育て初期であった。

つづく

■バリ人気質のニューウェーブ？

前回とりあげた純情少年の話の中に“cuek”というのがあった。“Aku berusaha cuek”話の場面は、クラスみんなの前でイタズラ書きの内容を読みあげるところで、恥ずかしさを克服しようとする意味だった。

この“cuek”ということばは、インドネシアの辞書にもまだ出てこない新語で、もっぱら会話の中でしばしば登場する。初めて耳にした時、意味がさっぱり通らなかったことがあった。“Bagaimana sifatnya?／彼はどういう性格？”と尋ねたら“Cuek”と答えが返ってきた。“cewek／若い女性”と聞き違え、ナヌ？女たらしということか、それとも女性的ということか、それにしても“cewek”にはそんな意味あったかな、と大いに迷った。

その後たびたび聞いているうちに、どうやら「体面を気にしない」といった意味らしいと分かってきた。例えば、少し奇抜な格好をして外出するのに“Cuek saja”なんて言ったりする。

ちょっと目新しいことをするのにも“Malu／恥ずかしい”だの“Tidak berani/臆する”だのと、守りの姿勢の強いバリ人の間にも、“cuek”なメンタリティを持つ若者が出現し始めたのかもしれない。

■純潔とは…

Bali Post 日曜版に「Kelopak Kehidupan」という性の悩み相談コーナーがある。だいたい“悩み”というのはいずこも同じで、小さいだの大きいだの早いだの遅いだのといったものから、デキちゃっただのビョーキをうつされてどうしようだのといったものなど、普通の人々が抱えるごくごくフツーの相談事が載せられている。

でも、時には同じ性の悩みでもいまどきの日本人の常識からすると「なんでそんなことで悩むの？」と首をかしげるものもあるし、また、いかにもバリらしいなと思わせるものもある。さて、つぎの相談事を読者の皆さんはどう考えるか？

Bさんというデンパサールに住むある女性からの相談。彼女には3歳年上の恋人がいるが、両親はまだ認めていないので、もっぱら彼女が彼のアパートに通っている。／Saya mempunyai pacar yang ujianya tiga tahun lebih tua. Tetapi orangtua saya melarang saya pacaran. Jadi saya yang ke tempat kos pacar.

会うたびに彼はセックスを求めてくるけれど、彼女は拒み通している。彼女の言い分を聞いてみよう。
Karena risiko sebagai cewek menurut saya sangat besar. Saya ingin menyelsaikan kuliah dan mendapat pekerjaan yang baik. Saya tidak ingin hamil sebelum cita-cita saya terwujud/女性としてのリスクは、私の考えではとても大きいと思うのです。学校を卒業したらいい仕事に就きたい。自分の夢を実現させる前に妊娠なんかしたくないんです。フムフム、なるほど。

もちろん避妊方法はある。彼もしきりにそれを言う。“大丈夫だって、絶対妊娠しないから/Kita bisa jaga, pasti tidak hamil”それでも彼女が同意しないのは、妊娠だけが問題なのではない。Saya takut setelah melakukan hubungan seks saya akan ditinggal/性関係をもったあとに、捨てられるんじゃないかと怖いんです。フムフム、そういうことも世の中には確かにあるナ。

しかし彼女とて、彼の性欲/nafau seksそのものを否定しているのではない。だから（だからといって、と言うべきか）、こともあろうにanal seks/肛門性交（と、訳すのも照れちゃうヨ）は許しちゃうというのだ。それで、彼女の質問が、Apakah anal seks berbahaya?/バックって危ないですか？なんていうんだから、どうなってんの～って言いたくなるでしょう。

後ろはいいけど前はダメ！っていうBさんの貞操観、はっきり言ってぴんぴん坊よくわかんな～い。

バリで働きたいあなたへ

2

Megumi

HELP WANTED

パスポートに押された仰々しいインドネシア共和国のスタンプ、これは言ってみれば“とりあえずの滞在許可”のようなものです。バリに戻ってから、つまりビザを取ってインドネシアに入国してから１週間以内に、正式な手続きのための膨大な量の書類を用意して、デンパサールの入国管理局に行くことになります。

私の場合スポンサーであるアグンラカさんが、専門の人を頼んでくれました。デンパサールの入国管理局の入口で彼女 ―イブＮと待ち合わせをし、ドキドキしながらあとについて中に入ります。ちなみに、皆さんの中にもご存知の方がいらっしゃるとは思いますが、入国管理局、イミグレーションに行くときにはなるべくきちんとした格好をしていった方が良いでしょう。イミグレーションの入口にイラストの但し書きがあって、タンクトップや短パン、それにゴム草履などもダメ！となっています。バリに限らずインドネシアというところは、この暑さにもかかわらず、オフィスでは皆さんきちんと制服を着用し、颯爽とお仕事をしています。これは私の主観ですが、インドネシア人には“着ているものを見て人を判断する”というようなところがなきにしもあらず。ある一定以上のポジションにある方たちからは、特に服装を重視する傾向があるように思われることも…。“洋服で人を判断するなんて”と憤慨なさらぬように。高いものを着なさい、ということではなく、内面のダラシナサが服装にあらわれるような、そういう格好は控えたほうがいいですよ、ということです。ブランド品のタンクトップと短パンにブランド品のサンダル、という格好より、ノーブランドでもこざっぱりとしたポロシャツとチノパン、の方が好感を持たれますよ、と、そういうことです。少し話がずれましたが…。

さて、イミグレーション１階の廊下に置かれた椅子に座って待つことしばし。最初に通された部屋で、なんといきなり指紋をとられました。今は懐かしき“謄写版インキ”みたいなものに、係の人に手をむんずと掴まれ、右と左で計10回、手の指１本１本をぐっちゃりとひたしてはべったんと指紋をとっていきます。終わった時には両手の指が真っ黒です。それから２階にあがり、ちょっとした広さのある部屋で、何人かの外国人とともに、椅子に座って順番を待ちます。この一連の作業、やはり出来ればインドネシア人、もしくはよほどインドネシアに慣れた人に一緒に行ってもらった方が安心です。だいたい役所というのは一種独特の“とりつく島がない”という感じのする場所。またここで提出する書類の数も半端ではありません。一人ですべてをこなそうと思ったら、緊張も手伝ってパニック

を起こすかもしれません。幸い一緒に行ってくれたイブＮというのはどうやらこの道のベテランらしくきりりとしていて堂々としていて、でも私にはとてもにこやか。“心配しなくていいのよ”と言ってくれたその笑顔をまるですがるように見つめるしかない私なのでした。イミグレーションの係員とも顔見知りと見えるイブＮは、会う人、会う人何か軽口を言い合いながらてきぱきと、あっちの窓口に書類を出して、こっちの窓口から書類を受け取り、とてもとても頼もしいお姉様…という感じです。ひたすらイブＮのあとをちょこちょことついて回っていた私でしたが…なんとこのあとに名前を呼ばれ、イミグレーションの係員と１対１の面接となったのでした。“インドネシア語は出来ますか”に始まって、名前と誕生日、生まれた場所を聞かれ、それから仕事の場所とスポンサーの名前、単純に書類と照らし合わせるだけ、のような面接はものの３分ほどでおしまい。イミグレーションでこれだけのことをすませて私が手にしたのは、ブルーの表紙の小冊子で、通称ブク・ビルと呼ばれているものです。正式には“BUKU PENGAWASAN ORANG ASING”、すなわち“外国人証明”。そして、写真の貼られた１枚の身分証明書のような紙。これこそが“KITAS”（KARTU IZIN TINGGAL TERBATAS）です。以前はKIMS(KARTU IZIN MENETAP SEMENTARA）と呼んでいましたので、今でも“キムエス”と言ったりすることがありますが、現在は“キタス”が正しい名称です。これはインドネシア人にとってのKTP（KARTU TANDA PENDUDUK)、身分証明書に匹敵するもの。外国人にとっては、滞在許可証明とも言えるもの、です。とうとうKITASが取れた喜びで感慨に浸る私…。ところがイブＮ、“さ、次行くわよ”とばかりにパンプスの音響かせてさっさとイミグレーションをあとにします。

その次に我々が行ったのは警察です。別に悪いことをしているわけではないのですが、やはりちょっと緊張します。おまけにデンパサールのこの警察というのが、建物が古くて中が薄暗く、警官の顔もどこかしら陰気くさい…(あ、最後のこれは私の主観ですね、ごめんなさい)。ここではなんと、身長と体重を計ります。プロフィールデータを書き込む書類があって、それを書き込んだあと、又しても指紋を取られます。そして通称ブク・クニンと呼ばれる黄色い表紙の小冊子をもらえることになります。正式には“SURAT KETERANGAN LAPOR DIRI”。この小冊子の表紙の裏には“インドネシアですでに滞在許可を取得した外国人は、30日以内にもよりの警察に届け出ること、怠った場合は１年以内の懲役、または最高５百万ルピアの罰金を課す”というようなことが書かれてありますので、KITASを取った方々、くれぐれも警察へのLAPORAN(申告）をお忘れなく。

さて、これだけのことをすませて、安心するのはまだ早い！！

一番大事なことを忘れていませんか？　外国人証明と滞在許可と警察への申告が済みました。でも…そう、この３つの中のどれにも、“働いてもいいですよ”の文字はないのです。インドネシアで働いて、収入を得るために一番肝心な“就労許可”これが手元に届くまでは安心してはいけません。

とは言うものの私の場合、通称ブク・メラと呼ばれる赤い表紙の小冊子“就労許可”“TANDA LEGITIMASI IZIN KERJA TENAGA ASING”が手元に届いたのはそれから８ヵ月後でした。その間私は不法就労をしていたことになるのでしょうか…。とても不思議な出来事があります。97年８月中旬のことでした。この月はバリで、外国人不法就労者を取り締まる強化月間のようになっているらしく、あっちでもこっちでも色々な噂が飛びかい、ウブドにもものものしく警察の一行が、外国人が経営に携わっている店に訪れ、なんとは言えず落ち着かない毎日…。ある日イブＮから慌ただしく電話があり、“今からブク・メラを持っていくから”とのこと。初めて手にしたブク・メラに又しても感慨を募らせていたその翌日…私の勤めるホテルに警察がやってきました。ブク・ビル、ブク・クニン、ブク・メラ、KITASを見せる私に、警察は“ほ～”と少々驚いた顔をして、“ブク・メラ持ってるんだ…”と言ったのです…。

聞いた話によると、このブク・メラを取得するのは、大変に難しい、そうです。きちんと手続きが済んでいるのに、なかなか渡してくれないこともあるそうです。実はこの年の３月頃だったでしょうか。いきなりバリポストに“インドネシアで就労する全ての外国人に１ヵ月100US$の税金を課す”というトンデモナイお触れが載りました。こういうことがいきなり決まってしまうのがインドネシアです。８月のはじめにイブＮから連絡があり、１年分1200US$、当時のレートで320万ルピアをすぐに支払えるように用意してくれ、と言われ、私は銀行に走りお金を用意してイブＮに渡しました。それからすぐにブク・メラが届き、翌日警察がやってきた…。この、まるで用意されていたかのようなタイミング…。もし警察が来た時にブク・メラがなかったらどういうことになっていたのでしょうか。インドネシアで働くには、少々のことにはたじろがない度胸が一番大切です。

さて、余談になりますが、インドネシアに滞在できるビザには、KITASの他に“SOSIAL BUDAYA”と“KUNJUNGAN USAHA”があります。前者は文化を学ぶ目的の方のためのビザ。踊りやガムランなどを学ぶ目的で長期滞在したい方は、このビザを取得すれば最長半年間はインドネシアに滞在できます。後者は、

俗に“ビジネスビザ”と呼ばれるものです。ここで間違ってはいけないことは、前者後者とも、このビザでは“インドネシアで収入を得ることは出来ない”ということです。例えばあなたが日本でエスニック小物のお店を持っているとします。買い付けや注文のためにバリに来る…そんな時に取得するのが“KUNJUNGAN USAHA”です。こちらでは“ビジネス”のために滞在しているのだけれど、インドネシアでは直接収入を得ていない、という場合に与えられるビザです。

しかしこちらで就職をしたいと考える方のために参考までに申し上げますと、外国人スタッフを雇って、この“ビジネスビザ”しか取ってくれないところも実際にはかなりあるようです。給料は勿論くださるようですが…。このビザですと、最初の２ヵ月間はイミグレーションや警察に行く必要もないのですが、３ヵ月目からは毎月デンパサールのイミグレーションに延長の手続きに行かなければなりません。その時に係員に“働いています”というようなことを言ってしまったら最後、あなたはずっとイミグレーションにマークされることになるやもしれません。厳密な意味で言えばこれは“不法”なのです。それでもインドネシアで、バリで、チャンスを掴みたい…というのなら、それから先は個人の価値判断の問題でしょう。ただ、この“ビジネスビザ”という言葉、その意味についてははっきりと知っておく方がいいと思います。

手続きは完了しました。いよいよインドネシア、バリでのお仕事の日々が始まります。それは予想にも増して私にとって、奇々怪々な初体験の日々となるのでした。その様子はまた次号に…。

●つづく●

はみだしスナップ

さる５月23日、東京の飛鳥山公園で、イ・マデ・マハルディカ氏のバロンダンスが披露されました。実はこの方、極通読者にはお馴染みのエナちゃんのだんな様…デド氏。エナちゃんの里帰りに同行した彼の来日スケジュールに合わせ、バリ舞踊家の浜中洋美さんと深川バロン倶楽部の皆さんの協力で、今回の催しが実現しました。短い来日スケジュールの中、ほとんどまともな練習も出来ず、バロンとのご対面も当日の朝…という超ブッツケ本番。しかし周囲の心配をよそに、みごとに命を吹き返したバロンは、森の中から現れたり、観客席まで降りてきてくれたりと、とても楽しげに舞っていました。

（東京／えりり）

●踊り終わった直後のデドと後ろ足のタケちゃん。呼吸はバッチリ！

地球の歩き方
バ リ 島
個人旅行マニュアル

発行所：　ダイヤモンド・ビッグ社
発売元：　ダイヤモンド社
定　価：　1540円
コード：　ISBN4-478-03436-2

by エナちゃん

日本の皆さん、いっかがお過ごしですかぁ？

さてさて久々のご本の紹介です。手前ミソで申し訳ないのですが、極通バリ本部の面々が頑張って執筆のお手伝いをした「地球の歩き方・バリ島・個人旅行マニュアル」です。以前から「地球の歩き方」の編集などを手がけていた小高氏の指揮のもと、今回は企画段階から（いっちょまえに）頭を突っ込んで、楽しいガイドブックを作ろうと意気込んでみました。

こうしてみると、バリ島に関するガイドブックってホントにたくさん出版されてますよね。エナちゃん自身もそうだったけど、バリのことをもっと知りたいと思って、まず買うのはガイドブックだったりするんですよね。そんで、買って読んで、読みつくして、「あ～、早く行きたい 」と思うわけです。ちなみにエナちゃんが初めて買ったのは、宝島スーパーガイド・アジアの「バリ島」でした。

当時、十数年前は、それこそ情報もまだ乏しく、ヌサ・ドゥアの観光開発も始まったばかりで、バリはまだまだ静かな南国の島でした。ウブドの地図にはほんの少しの建物が載っているだけ。でも、そこに書かれていたバリを語る文章のどれもが私にとっては宝石のように輝いて心にせまってくるのでした。巻頭に載っていた、小さな池に咲く一輪のハスの華、裸ん坊の子供の笑顔、そんな何でもない写真が、まるで天国から届いた映像のように私をうっとりさせたものです。

今は、その頃とは比べものにならないほど、バリについての情報が増え、ガイドブックの内容も充実したものになりました。でも、ホテルやレストランが増えても、交通事情が便利になっても、昔のバリの魅力は今も変わらず、ここにあり続けています。昔のエナちゃんのように一冊のガイドブックを読んで、読者の皆さんがもっともっとバリを好きになってくれたら、という思いを込めながら、この本の原稿を書きました。

そして、執筆に参加してくれた成瀬さん、恵さん、史朗さん、コテっちゃん、大原さん、深谷君、ユキちゃん、その他大勢の友人たちも、心からバリが大好きな人たちです。

皆さん、これを読んで、どんどんバリに来てちょ～だいネ！

PS／小高さん、私たちの読みにくい原稿をうまくまとめて下さってありがとうございました。皆、楽しく参加させてもらい喜んでおります。おかげでエナちゃんも日本で豪遊（？）できました。

バリ日記(4)

ウブド大好き！

渡辺一郎 & 小堀桂子

４度目のバリ／その１：1997年４月27日～５月４日

はじめに：今回の連載から、３回目を飛ばして４度目のバリです。昨年９月にもバリに来ていたのですが、その後忙しくて日記に仕上げることができませんでした。１回目、２回目は、バリ島の中の複数の街を訪れましたが、３回目からはとても気にいった街ーウブドのみの滞在。

というのも、気にいった街を何度も訪れる、旅先に常宿や行き着けの店を作る、ということをしてみたいと、ずーっと思っていました。また今回は、桂子と一郎の休みの日程が合わず、二人が共通して休める日に旅行をすると現地にいられるのが３日弱になってしまうため、それぞれの休みに合わせて日程をずらせて行く、ということを初めての試みとしてやってみました。これも、気心の知れた街ーウブドだからこそできたこと。まるで自分の田舎に帰るように何度でも訪れてみたいと、私たちの気持ちを捕らえてしまった『ウブド』。ウブド病はなかなか納まりそうもありません。（桂子）

あなたが素敵にヒマツブシできますように。会社をさぼった昼下がりのウララカな陽だまり、お気にいりの紅茶を楽しむ憩いのお供をさせて下さい。少しだけ今よりもステキな気持ちになれるかなぁ。（一郎）

■ 1997年４月27日

出発当日になってしまった。5時起床。妻桂子は、当然まだ寝ておられる。この状態を当家ではねぶた（寝豚）祭りと称している。私だけムリヤリお目覚めの後、紅茶を飲みながら荷物の最終点検。どんどんボロが露呈される。

7:47、市バスで京都駅へ。いつもはMKタクシーを使うのが定番なのだが旅慣れたとゆーことか。

京都駅ではCATをす。日本アジア航空はJAL系なので、重い荷物は京都駅からバリまで直行、しかも京都駅で搭乗券まで発行してくれるという素晴らしさ（これがCATシステムね）。多少高くとも、やはりJAL系さ。あなたも乗るならJAL系ね！

はるか出発す。途中省略、関空到着。いつもは難儀する荷物・搭乗券の段取りもCATシステムで既に終了。ヒマを持てあまして桂子にTELす。愚図愚図しておられるご様子。ええ～い、うっとおしい奴輩じゃ！

EG221、12:00御搭乗。いきなりワイングビグビして寝る。2時間後起床。読書。またワインをもらってグウビグビ。うつらうつら。睡眠学習す。持ってきた本は全て読破してしまった。こんな事なら『徳川家康』全26巻クラスを持ってくるべきだったと反省。ヒマだ。

バリ・ングラライ空港着。税関ではあえて、フィルムをギョウサンもってきたぞ、と申請してみる。というのも、自分でいうのもナンですが、私の風貌は「この顔にピンときたら」風らしく、税関ではいつもOPEN命令されてしまうのだ。ええい！だったらコッチから申請してやろうじゃねぇかい！とイキまいていたら、あっさりOKされてしまう…。虚しいのお。

タクシーを捜す。空港からのタクシーはチケット制なので、ぼられる心配一切是無事也。47000Rp(2350円)。一時間ほどで目的地ウブドのホテル、チャンプアン着。30～40年代のバリを舞台に、その天才ぶりを発揮した、ウォルター・シュピースの根城跡だ。ウブドの西端の小さな渓谷にへばりつくコッテージタイプの中級ホテルという。が、今は夜なのでなにも見えん。

とりあえず荷物を部屋に放り込んでメシお出かけす。ウブド歴4回目ともなると、この時間帯ではあそこの店さ、と、じゃらんじゃらん。今夜は「ムンブルズ」にしてみました。これも渓谷にへばりつくスタイル。ウブド訪問時には定番の、中級レストランである。

お座敷のソファがじっとり湿っているところまで懐かしい。とりあえずビンタンビールね、グビグビリ。ぷふぁ〜〜〜！！ナシゴレン＆ソトアヤム、パクパクパク。おねぇさん！ビール、こんどはバリハイね！グビグビ！

ウィ〜！へべれけ状態でホテルご帰還す。暗くて自分のコテージが全くわからない。げ！これ、よそのお宅じゃねえか！すんませんなぁ。なんせ道に迷ったもんで。着替えもできずにベッドに倒れ伏す。ZZZ〜。(一郎)

桂子は26日（土)･27日（日）は休みなのに､28日（月）を休むことができないばっかりに、29日からの出発なのだ。一郎は先に行って、先に帰るスケジュール。桂子はいつも後に残されて、何だか寂しいのだ。

一郎から、関空からとウブドからTELあり。うらやましいから、いちいちかけてこなくていいのに。ホテルの部屋は『バンブー3』で、まあまあとのこと。まあまあとは何ぞや？今回のホテルは『ホテル・チャンプアン』。街中から少し離れて不便だけど、景観がとてもよいということでここを選んだのだ。また第二次世界大戦前に、欧州の芸術家達がこぞってバリを訪れていた頃、その先駆者となってバリを訪れたドイツ人画家ウォルター・シュピースがこのチャンプアンに滞在していたとのことで、彼の使っていたコテージがそのまま残っているらしいし（ここはスペシャルルームとして使えるそうだ)、2つのホテルのプールのうち1つは彼のデザインしたものとのことで、古きよき時代のバリ（今だっていいけど！）が感じられるかと期待していたのだ。「ものすごくいい！」はずなのだ！なのに『まあまあ』なのかい？何があったんだい？残された者は､妄想ばかりがふくらむのであった｡あな､悲しや｡(桂子)

■ 1997年4月28日

AM5:00ころ？遠くからなにやら大声が聞こえてくる。ウブドのお目覚めは興ざめなアホ声でなされてしまった。体育会系クラブのランニング声のようだ。エイホ､エイホ､ギャー！ギャー！ギャー！ランニング声の隊列はだんだんこのホテルに近づいてくる。事態が次第にはっきりしてくる。体育会系クラブなどではない。これはあきらかに軍隊の示威行動だ。いま、インドネシアは総選挙時期。スハルト率いる与党、ゴルカルが警察と軍隊をフルに使って選挙運動を繰り広げ、他党へは弾圧をしている、とは新聞報道で知ってはいたが、実際現場で本当に遭遇しちゃうとやるせない気持ちになってくる（この原稿を訂正している98年6月段階ではスハルトは退陣したのだが)。この光景を見るために外に出てみる。30人ほどの迷彩服着た軍人が列をなして行進。なんか弱そう。インドネシア陸軍は世界最強軍隊のひとつのはずだが、ここはバリ。バリ人の軍隊

は､学生時代に遊んでもらった第7機動隊ほどの威圧感だ。

気をとりなおして朝メシにす。ホテルのレストランはすげえ建物。崖にへばりつき、片側面は全面オープンの吹き曝しというユニークさ。ウブドにはこんな建築がごろごろしている。決して奇をてらっているわけではなく快適さを究極まで演出したらこんな建物になりました､てなカンジ。2Fに陣どり、ウブドの朝の空気感を愛でてみる。雨あがりの渓谷がそのままホテルの庭という贅沢さだ。ガジュマルの大木が真下に見える。朝の光が大木の背後から木漏れ日に見え隠れしてきた。鳥たちが群れ集う大木の緑は、朝露を光らせていつもより生気を感じさせる。遠くの木々の葉の一枚一枚がはっきりと解る程の空気の澄み様だ。

朝メシ到着。コーヒーとトマト・チーズオムレツ。バリは好きだが、バリのコーヒーはいまでも好きになれない。薄ぼんやりとした味のくせに、カップの底に泥のように粉が沈殿している。透明感と濃厚感、この矛盾した持ち味をいかに止揚するかが、コーヒーの課題じゃないの。でもオムレツはすばらしい｡野卑な地トマトとチーズが､パンケーキ風の卵焼きにくるまれている。八百屋という稼業柄、食い物にはうるさい渡辺でした。

木漏れ日の輝きが増してきた。ガジュマルに後光がさしてくる。さて、ホテルの中を探索してみるとするか。

ウォルター・シュピースのアトリエ跡は、新プールの上のコテージらしいが、ちょっと覗いたら、当時の面影を残すものはほとんど無いみたいだ。げ、しかも今滞在しているのは日本のねえちゃんではないか。実はシュピースルームに部屋を替える画策をしていたのだが、や〜あめた。今の部屋､「バンブー3」に定住を決意。一応桂子に御報告しよう。

だらだらホテル内をお散歩しながら（そのくらい広い敷地だ）部屋に帰り、お朝寝。ウダウダ10時過ぎ、街へくりだす。

JLラヤウブド通りを西→東にダラダラ歩いて、ウィンドゥショッピング。30年代のバリの記録といった、お目当ての本はなし。ジャワのお眠りガムランといった、お目当てのCDはあり。お目当ての塩、市場価格1Kg？1000Rp（50円)。重いから後で買おう。

今回の旅行の主要課題、スマラ・ラティ歌舞団観劇の会場、クトゥ集会所を下見。暑い！のもあたりまえ。赤道直下だ。ここにはここの歩き方がある。せかせかするのは危

険だ。コーラで蘇生す。南国でまいった時のコーラはいつも私を蘇らせます。

昼だ。「カキュー」でナシチャンプルー＆ビンタンビールだ。ばぐ〜す！至福の味覚、これで275円だぜ。

ホテルの部屋に帰ってお昼寝。「バリには寝にきたのか？」と、ボーイにからかわれてしまう。日本で懸命に働き、バリで寝る、という人生観をボーイに説教したかったが、英語を考えるのに疲れ果ててまた寝る。渓谷にはいい風が吹く。ガジュマルの大木も、風に乗って静かにざわめく。ウブドを音で表現したらそれはガムランではなくて、そよそよさわさわ風のささやきだと思う。ああ、また眠くなった。

6:00PMに起きて、シャワーでまた蘇生。サダ・ブダヤ歌舞団を観劇に、ウブド王宮へ。明日の本命、スマラ・ラティ撮影のための予行練習でもある。が、プリ・マドンナのグンマニさんの踊りに、いつのまにか夢中に。喜・怒・哀・楽を身体のシナ、指、目、表情の全てで表現している。私は踊りなんか全く興味ないが、グンマニさんの踊りはボンクラの私でさえわかりやすく感動させてくれる。グンマニさんが終わればこの歌舞団には見るものがなかったので、途中で帰る。ねるねるねるねる。ZZZ。（一郎）

仕事を終え、歯医者へ。何と桂子は、1週間前に奥歯を抜いたのだ。抜歯中に先生が何度もため息をつく程、頑丈な虫歯だったらしく、抜歯の後縫ったのだ。その糸を今日抜きに行った。傷口がまだ治っていないので、バリでスパイシーな料理を食べたりすると大変なことになるのでは？という不安が残るが、ま、しゃーない。

荷物の最終点検等していると、一郎からTEL。文庫本、動きやすいズボン、傘を持ってきてほしいとのこと。傘？雨降ってるの？だって今はバリは乾季のはずなのに…。なんだかなぁ、と思いながら傘2本をスーツケースに入れて寝る。あー、明日はやっとバリに行けるのだ！（桂子）

■ 1997年4月29日

桂子が今夜来るので、空港からの送迎の手配を確認する。スマラ・ラティ講演開始時間に間に合わせるため、空港→ホテル、でなくて、空港→クトゥ集会所に行ってほしい、と頼んでおいたのだ。フロントのオヤジが言うには、「飛行機が遅れたら、ワイフはホテル直行だで。ワシもそうそうホテルを空けられへんしな」。

「そこをなんとか。バリ4回目にしてやっと実現のスマラ・ラティ観劇を絶対ワイフと一緒に見たい！」「ソウ、シンパイシナイデ」。「？！」なあんだ、おっさん、日本語できるじゃないの。初めから使えよな。お散歩である。昨日のサンダルマメを総括して、今日はバチものNIKEである。しかもMADE IN INDONESIA、故郷の土をたっぷりと味あわせてあげるからね。

ウブドを北西にてくてく歩く。車がずんずん通過する中、ケバいねえちゃん乗せたジムニーが急停車。運ちゃん手招き「オレの名はトニー。香港から来たのか」「日本だ」「オレの妹（？）美人だろ？日本語を話すぞ。ラッキーなやつ。OK，一緒に行こう！」ぬあにがトニーだ、妹だ！ただの流しのボン引きじゃねえか。以降完璧無視す。わたしは愛妻以外とは接触しない主義なの！

てくてくてくてく歩く。暑いかつ煙たい。インドネシアは車検制度がでたらめらしく、排気ガスがすさまじい。しかも坂道の多いウブドだ。ゲホゲホ。車道から早く逸れたいが、いい脇道がなかなか無い。我慢してずんずん歩く。1時間ほどしてやっと素敵な脇道出現。珊瑚の焼き灰をアスファルト替わりに撒いた道。ウブドの青い空の元、白い一本道が続いている。田んぼには合鴨がガーガー。道ではねえちゃんがスラマッシアン！と微笑んでくれる。田舎はええのぉ。青い空、ライステラス（棚田）の中を、白い道が一本続いて行く。道はどこまでも続いて行く気がする。吸い寄せられて歩き続ける。椰子の木がサラサラ風に鳴る。歩き続ける。疲れたらバリ名物の道端の涼み台をちょっと拝借、お昼寝ね。また歩き続ける。

道はなにか大きな門につながって、途絶えてしまった。なんだろ？門に看板ぐらい着けろよな。ええい！入っちまえ！門から人にでくわす建物まで10分近く歩く。どうもホテルのようだ。それにしてもでかい。ロビーにはスタッフらしき人物。「ホテルを説明して下さい」「ドウゾ、ニホンゴデ。ダイジョウブ」。彼は日本語のガイド氏。ホテルのスタッフではなくて、このホテルに泊まった日本人に雇われているらしい。通りいっぺんの会話の後、「ニホンノオンナ、キレイ。ワタシニホンノオンナ、スキデス」。ふぅ〜〜〜ん。「ニホンノオンナ、ハダガシロイ。きゃ〜！きゃ〜！サケブ、カワイイ」。おいおい、それって、単にアホ女ということ？「ワタシ、ニホンノオンナトヤリタイ。」え?!さすがの渡辺も、こうまで露骨に言われるとあきれたぼういず。「アナタ、ばりノオンナト、ヤリタイデスカ？」だからさ、おれは桂子以外の女と……と言いかけたが、こんなヤツをマジメに相手するのもバカバカしくなってその場を退散する。バリのスケベ男って、日本人専門の職業的ジゴロが多いらしい。ジゴロはとびきり美男子でなければ勤まらないのであろうが、このガイド君は同性のわたしから見てもとびきりのブ〜〜〜男でした。

ホテルの部屋にもどってお昼寝。お目覚めの後は待望のスマラ・ラティを見にクトゥ集会所へ。ここで落ち合うはずの我妻桂子はまだ、日本からお着きでないようだ。最前列に陣取り、開演を待つ。会場の客は100人程。そのうち半数以上が日本人で、みなまじめにスマラ・ラティを見ることを目的にしているようだ。他の歌舞団の会場ではさ、「さ、社長！こちらの席へ。」てな、バリまで来てサラリーマンするな！的光景も散見されるもんね。この会場ではその代わりに、「このまえな、マデをな、部屋に連れ込んでたら、クトゥにばれてしもてな、マデ、むっちゃ怒らはってな」てな長期滞在ギャル的光景が散見されるのだが…。

いつのまにか日本より愛妻桂子御到着！ぎりぎり開演に間に合ったご様子だ。当年とって32歳、腹に脂の浮き出た大年増とはいえ、前述の長期滞在ギャルの中におわすと

掃きだめの鶴（豚？）か、さすがにひきたつ。初の海外でのお待ち合わせは無事完了。

さて、会場後ろ、舞台と逆側から、バラガンジュールの爆音と共に楽団メンバー登場。この趣向からして、ダラダラなんとなく演奏が始まるのが多い他の楽団とは根本的に異なる。ようするにプロなのだ。位置につく。

じゃあああああ〜〜〜〜んん〜。え、なに？しょっぱなからこの縦横無尽、天衣無縫フレーズの永久運動攻撃だ。各奏者のキメ場所が、バンド全体で一致しているのは言うまでもなく、キメのポーズの腕の上げ方の角度まで完全に一緒。すごい。

こんな複雑な楽曲を、毎回寸分たがわず演奏しているんだろな。だってCDと全く同じバージョンだもんな。ズ〜ンとくる躍動感、バンド全体の醸しだすうねりの幅。他の歌舞団のバンドと比べて桁外れにものすごい。ああ、オレにもっと文章表現力があったらなあ！もどかしい！CDで聞いた時にはイマイチだと思ってた楽曲でも、実際目の前でやり出された日にゃあ、アナタ！別人28号のものすごさをもって迫ってくるのですよ。

そのガムランをバックに、いろいろな踊りが進んでいく。その中でも戦士出陣の武者震いと緊張、不安、そして誇りを表現したバリス・ダンスがすごい。舞うはこの歌舞団のリーダー、アノム氏である。他の歌舞団では、バリスは少年が舞うことが多い。子どもバリスには、初陣の不安と気負いが彷彿され、それはそれで趣があるのだが、裏を返せばそれは子ども芸の領域に過ぎない。

アノム氏のバリスには戦（生きること、と言い換えてもいいだろう）に対峙する時の不安、殺さなければ生き残れない、という宿命への葛藤、それを受け入れることの焦燥とあきらめ、というメッセージまで私につきつけてきたのだった。ああ、観れてホントによかっただ。

アノム氏のヨメハンはアユさん。プリマドンナである。日本で読んできた紹介記事でも、その踊りはベタボメであった。人間の喜怒哀楽。怒る事と哀しむ事が多い人間の窮屈さ。喜ぶ事と楽しむ事を忘れた人間の憐れさ。そんなアユさんの人間観まで表現された踊りである。踊りに人生観の表現なんてアナタ、大げさでんがな、なんて言わないでね。渡辺でもたまにはムズカシク考える事あるんです。4月28日に観た、グンマニさんとの比較。私はアユさんではなく、グンマニさんの踊りを愛する。彼女の踊りは人間の感情すべてを表現するからだ。喜び、怒り、哀しみ、楽しむ。アユさんの踊りはそのうち怒りと哀しみを強調する。それがあまりにもリアルすぎて、観てるのが辛いのだ。現実の人生が多かれ少なかれそのようなものであることくらい百も承知であるが、やはりそれをハイと受け入れるのは辛いのだ。

喜、怒、哀、楽。人生には全ての感情がバランス良く必要。辛くみえるけど生きてりゃ少しはいい事あるかも。グンマニさんの踊りにはそんなメッセージが込められている。彼女の前向きな人生観を照射して。バリ4回目にしてやっと観れた、スマラ・ラティ公演は終了。

ホテル近くのブリッジ・カフェでディナーす。しかし桂子はメシもそっちのけでしきりとあやしいお誘い。はいはい、帰りまひょね。そんなことしたっけなぁ。ホテルへ帰って、ひさしぶり〜に…。しかし、インパクトの瞬間、本当にその瞬間に停電になったのにはまいる。だれかキをきかして演出したんじゃねぇだろうなぁ。のぞくなよな。

■ 1998年4月30日

6時過ぎごろ目覚める。一晩中降っていた雨が、今も川の音に混じってザーザーいっているのが聞こえる。ベッドの中でウダウダしたり、本読んだり、しゃべったりして、9時過ぎに起床。雨なので、何だかダラダラしてしまうのだ。

気をとり直してホテルレストランで朝食。トマトチーズオムレツにフルーツ、ジュース、コーヒー等。今日の予定について話している内にもよおしてきたので、慌てて部屋に帰る。

雨、雨。青空が見えているのに、雨。予定では自転車を借りてウブド内をじゃらんじゃらんするつもりだったのだが、雨ではそれもかなわず。しかしこのままホテルの部屋でウダウダしていても仕方がないので、準備をして出かける。と、雨、小降りになって止む。しばしホテルの中を探険。シュピースルームは前のを模して、新しいのに建て替えたようだ。念願の冷蔵庫もある。桂子はルーム変更を希望。一郎よりOKが出る。が、何とシュピースルーム＄144！今のバンブー3は＄60なので倍以上だ。アキラメる。しかしあの部屋が＄144とは、あまりにも高すぎる！やはりシュピースルームということで、もったいをつけているのだろーか。

ホテル近くのムルニズワルンというレストランにて、明日の夕食のローストダックを予約。どこの席がいいか、まで聞いてくれる。その時、レジの近くの絵はがきや本が置いてあるコーナーで、一郎がシュピースの本を発見。（桂子）「ウォルター・シュピースとバリアート」という本で、1980年にでたオランダもの。白黒の印刷は製版が悪いのか、鮮明ではない。しかしシュピース関連の本を日本で捜すのは至難の技なのでどうしようかなぁ。（一郎）「どこに泊まっているのー？」とレジのお姉さん。「チャンプアン」

と答えると、もう買うしかないね、という顔。まあ、そうでしょうね。買う。

ベモを拾って、ARMA（アグンライ・アート・オブ・ミュージアム）へ。晴れてきた。すごい日差し。

まずブックショップ（売店）へ。去年来た時に見つけて買った、フラワーオイル。去年は7500Rp(375円弱）でフランジパニとかジャスミンとかバリならではの香りがあって、その香りも人工的なものではなく、とても気に入っていたのだ。今回も絶対買うぞ、と思っていたフラワーオイルが、今年は何と12600Rp(630円）になっている。げろげろ！それもクローブとかキライな香りばっかりで、唯一そそられるラベンダーも、よく考えたらラベンダーは涼しい地域で咲く植物なのでバリでは咲かない花なのだ。買うのやめる！え～ん。

ちなみに帰りに空港で寄ったプラザ・バリという日系企業のショップでは、このフラワーオイルがいっぱい並べてあって、その値段何と＄10！　＄1が127円ぐらいだったから1270円だった。それもローズとかレモンとかバリに関係ない香りのものばかり。きっと半分手造りみたいに作っていたのを、大きな企業がそのコンセプトとかデザインを買ってしまったのだろうな。大好きなフラワーオイルは、半年で全く別のものになってしまっていた。悲しー！

楽しみにしていたフラワーオイルにフラれたので、何だかがっくりと力が抜けて、まだまだこれからじっくり見るぞ～というオーラを発している一郎をブックショップに残して、外に出る。ARMAは美術館の展示品はいまひとつだけど、その建物とか庭とかがすばらしくいいのだ。その庭を見ながら、しばし休憩。欧米人の子どもが、ARMAのスタッフに遊んでもらっている。その親は展示品を見てきたのだろうか、カタログを見ながら熱心にしゃべっている。それ以外に人はいない。そんななごやかな風景を見てたら、心がなごんでくる。

ブックショップから出てきた一郎と、展示品を見る。日本語のできるARMAのスタッフが後ろからくっついてきていろいろ説明してくれるけど、自分のペースで見れないので結構うっとうしい。で結局はタクシーのポン引きであったり、最後には自分の絵を勧める売れないペインターだったりするのだ。シュピースの原画が1枚あって、それはじっくり。後はざっと見て、ココカン・クラブへ退散する。

ココカン・クラブ～ARMA内、高級タイ料理店である。ここはいろいろな本にも紹介されていて、味も雰囲気も良い（おまけにミックジャガーもお気に入りの店であるとか）とのことであるが、インドネシアに来てタイ料理、というのもなんかいやだなあ、と、ずーっと敬遠していたのだ。しかし、ウブド歴4回ともなると、どこの料理でも美味しければ良い、インドネシア料理でもまずければだめ、と柔軟に考えられるようになった。ウブドのスパゲティバジリコはすごく美味しいのだ。あれは食べないと損です！

さて風通しの良い、見晴らしもすばらしい2F席へ。ちょっと離れた所に日本人カップルがいるが、広々とした空間では問題ナシ。トムヤムクン、ナスとエビのグリーンカレー、ヤムウンセン、野菜の炒めもの、ビンタンラージをオーダー。そして飛行機の中で配られたサービスクーポンで、トロピカルフルーツカクテル×2。これは全く期待していなかったけど、意外にも美味しい。料理は全体的に70点のデキ。タイ本場の味、というのではないけれど、日本のタイ料理店と比べるとかなりイイ線をいく味だと思う。

風が吹いてきた。気持ちE。

ARMA内には他にもカッコイイカフェがあるので、お茶とデザートは場所を替えようと、出る。一郎はブックショップにて＄100の写真集を買い物。げろげろ。（桂子）

この写真集の価値をしらねえな。「バリ：イメージの博物館」というオックスフォード大学が1995年に出したもの。なんとシュピースの自身が写したバリ芸能の写真集。ライカとローライを構えるシュピースの肖像まで何枚かあるではないの。これが＄100は安い！（一郎）

ARMAカフェにて、お茶。ここは畳の上に靴を脱いで上がり込んで、くつろげるスペースがある。そこを目指して来たのだ。日本語のできる、オーナー風兄ちゃんがオーダーを手伝ってくれる。エスプレッソとレモンパイとアイスティーとバニラアイス。…が、どれも×。バリは乳製品がイマイチ。よってアイスクリーム、ケーキがどれもイマサンなのだ。雰囲気はとてもいいのに、残念でR。

シャツ屋・ハレオムへ行く。インドネシアの布には、バティックという染め物とイカットという織物の2種類がある。私たちは織物のイカットが気にいっていて、ハレオムはこのイカット専門のシャツ屋さんなのだ。シャツ屋さんなのでもちろん既成のシャツも置いているのだけど、その既製品が気に入らなくとも諦めることなかれ。布の中からお気に入りを選んで、オーダーすることができるのだ。値段は何と既製品と同じ、半袖は＄29・長袖は＄35。もちろんバリの物価ではかなり高価ではあるけれど、それだけの価値はあり。私たちは去年9月に行った時に初めて買って、「来る度に、1枚づつ買うぞ」と決めているのだ。一郎は薄い（一郎いわくチンピラ風）半袖シャツを買い、桂子はオレンジ色の布で長袖シャツをオーダー。さらに桂子のは分厚い高級な布だそうで、＄10アップと相成った。仕上がりは5月2日の4時。へっへーた・の・し・み！

さて実は今年の9月に、友人数人とまたウブドに来る予定。その時に泊まるホテルを、どこにしようか思案中なのだ。いつもはガイドブックを見たりして決めていたのだが、今回はちょっと下見何ぞをして、いいホテルに泊まりたいと思っているのだ。

シャツ屋のハレオム、ARMAカフェ、影武者に近い『アルティニ3』というホテルがその第一候補だったので部屋を見に行く。全体の雰囲気は緑が多く、オープンしたてのホテルなので清潔でいい感じだけど、部屋が今ひとつ殺風景な感じ。バリらしさが感じられないし、何より狭い。う～ん。ついでに影武者に寄って、伊藤さんへのお土産－京都のおたべをことづける。

次にアルティニ3から町中方面に少し歩いた所の『プリ

パディ』というホテル。ここはウブドには珍しく設備が整っているとのことで、アルティニ3と比べるために参考に見る。ここも出来たてのピカピカで、エアコン、冷蔵庫、シャンプーとリンス、果てにはTVまであって、その設備を自慢するだけのことはある。チャンプアンに泊まっていると言うと、「じゃ、＄90の部屋を＄60でいいよ」と気軽に大幅ダウン。桂子、ちょっとヨロヨロする。しかしその後プールを見にいったのが悪かった。ホテル内を歩いていると、作りかけてほったらかされているコテージが散見される。なんだかやーな感じ。「それに、チャンプアンに比べると、ホテル特有の活気が感じられないわな」と一郎。うーん、確かにそうです。桂子、潔くアキラメル。

次は、プリパディからモンキーフォレストに向かう途中の、『クブクー』というコテージ。このクブクーは、カフェとギャラリーとコテージを経営している。吉本ばなながとても気に入っている、と本に書いていて、ばななオタクの桂子としてはウブドに行くからには行ってみなくてはと、去年の5月に初めて来て、とても気に入ったカフェなのだ。ホテルの方は見るのは初めて。

カフェから見える、こんもりとした鎮守の森のような中にコテージはあった。緑豊かな庭の中に、ぽつんぽつんと手造り風のコテージが建っている。泊まっている人は『私たちここが気に入って長期滞在してまんねん』風。床や壁は竹で編んであって、ナチュラルな感じ。だが、蚊がいっぱい入ってきそう。1Fはくつろぎスペースになっていて、バティックのクッションやバリ風の置物が置いてあっていい感じ。でも2Fへ上がる階段は狭く急で、とてもスーツケースを持っては上がれそうもない。友人の旅のアンケート『旅行に必ずいつも持っていく物は？』の質問に『スーツケース。なぜなら、スーツケースで行けないような所には行きたくないから』と答えた桂子としては、これでは困るのだ。案内してくれた兄ちゃんに、「9月に来るかもしれないけど、可能ですか？」と聞くと、「2ヶ月位前に連絡してくれればOK。」とのこと。ゼヒヨロシク！と売り物のクブクーオリジナル絵はがきを持たせてくれる。

一郎は、もう頭の中がクブクーになっている。もうちょっと設備の整った所がいいよ、虫がいっぱい入ってくるよ（で、桂子の機嫌が悪くなるよ）、とあの手この手で説得するも耳を貸してくれず。しかし終わりには「んで、いい！桂子の好きにすれば！」と投げてしまう始末。果てには9月の旅行の私たちのスタンスにまで話が及んでしまう。も〜、旅行に来てまでムズカシい話はやめよーよぉ。

インフォメーションAPA？、着。明日のブドゥグル方面のツアーの手配をしてもらう。去年は1日ツアーで100000Rp（5000円）だったのでそのつもりをして来たら、今回は90000Rp（4500円）とのこと。ちょっと距離が近いからかな。顔見知りになったニョマンさんにも9月に来るかもしれないから、ツアーの手配等またよろしくね、とお願いする。ニョマンさんは日本語をしゃべることは出来ても読むことは出来ないそうで、予約が必要な手配のFAXは日本語をローマ字で書くか、英語で書いてほしいとのこと。げろげろ。

その後、ウブドビレッジホテルも見学。＄55の部屋と＄75の部屋を見せてもらう。どちらも「ま、悪くはないけどねぇ」というかんじ。初めてウブドに来た時はどこもかしこもすてきなホテルに見えたけど、泊まってみるとすごく虫が多かったり、じめっとしていたり、部屋の中が丸見えだったり、反対に暗かったりして、けっこう痛し痒しなのだ。

珍しくサッカーグラウンドでサッカーをしている。当たり前、と言うことなかれ。普段、このサッカーグランドは、子ども達がかけ回っていたり、フリスビーをしていたり、犬が昼寝をしていたり、と、いたってのんきな雰囲気の場所なのだ。それが今はうって変わって、男達が走り回り、サポーターが激しく応援をする、という本来の姿になっている。思わず立ち止まって眺める。「みんなばらばらの服装でしていて、誰が敵か見方かわかるのかなぁ」と桂子が言うと、それ以前に、サッカーコート中には30人以上の人間が入り乱れていて（普通サッカーは11人×2チームなのだそーだ）、ルールもへったくれもない状態で練習している（遊んでいる）らしいのであった。

ちょっと座って休憩してから、新しくできたスーパーマーケットへ。1年前に来た時に、ウブドの東はずれにスーパーができたらしいと聞いて行ってみたのだが、今年はついにメイン通りに小さなスーパーができたとのこと。電卓がつぶれてしまったので電卓と、シルバークローブ（バリ風タイガーバーム）ミニ缶、ばらまきおみやげスパイスを買う。私の大好きな石鹸は、海外ブランドに混じって、あったあった。手作り風のやつが。いろいろな種類を4つ程買う。ちなみにこの時買った石鹸は、レモン、ラベンダー、アロエ、ピュア等いろいろな種類を買ったがほとんどどれも同じだった。が、混ざり物のない、香料の入ってない石鹸本来の匂いがして、泡立ちも細かく、顔を洗うとしっとりとしてとても良かった。

晩ご飯はサッカーグランドの横の西洋料理店に行こうか、と言っていたのだが、戻るのもめんどくさいので、1度目のバリ旅行の時、まずまずだったミロズへ。

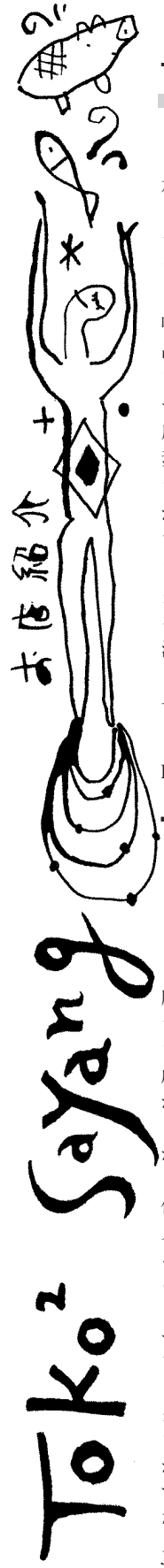
ミロズ、雰囲気は良い。

しかし味は最悪であった。バリに来て、こんなにまずい料理は初めてよ位、まずかった。で高かった。山の中の村で、魚料理を頼んだ私たちも悪いが、「トゥディズスペシャルフィッシュ」で2口食べてやめたくなるような、古くてまずい魚が出てくるとは誰も思うまい？かなしーい。明日のダックに期待しよう。

歩いて帰る。暗い道で、凶暴犬がわんわん吠え立てる。一郎がかばってくれる。バリで何が嫌いって、犬が一番嫌いさ！早く野犬狩りをしてくれ！と思うが、バリの人はそんな面倒くさいこと、しないのだろうな。

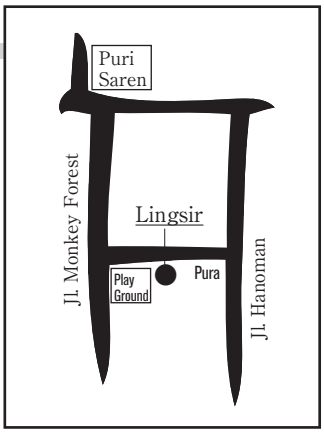
帰ったら一郎は、バタンQ。桂子はお風呂入って、家計簿つけて寝る。10:30かな。

●つづく●



Toko ◇ BEST 店

LINGSIR



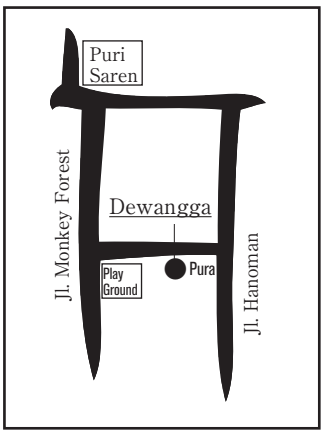
花びらの舞う、どこかしら和紙のような手触りの再生紙。あなたもウブドで見かけていることと思います。素材はパイナップルや竹などの植物。この紙で作られたメモ帳、レターセット、アルバム等の品々は、素朴な暖かさと意外な新鮮さが感じられる、ウブドのお土産モノのニューウェーブと言えます。店内にはこの他にも、バリの自然素材を利用した100%ナチュラルな製品が並びます。日本ではアロマテラピーが大変なブームとのことですが、ここはエッセンシャルオイルが種類豊富に揃っています。チューブローズ（水仙）やガーデニア（くちなし）などの甘い香り、おなじみラベンダーやレモングラスなどのさわやかな香りの他にも、少しくせはあるけれどインドネシアらしいスパイスの香り、たとえばクローヴやブラックペッパーなどなど…。化粧水として使える瓶入りのローズウォーターもあるので、これにお気に入りのオイルを一滴たらしてマンディ後のお肌にばしゃばしゃとたたいて…夜のお出かけはこれでキマリ！　ターメリックや海草の成分をプラスしたバスソルト、フランジパニやバニラ、チュンパカなどの香りが楽しめる石鹸、バラやジンジャーの香りのマッサージオイル、すべて100%自然素材ですので安心して使えます。極通スタッフの友人の一人は昨年10月にマッサージオイルを購入、毎日少量ずつ使用していたところ、なんと2年前のスキー焼けのシミが薄くなってきた、との報告あり。あなたも試してみますか？

P.O.Box 218, Ubud-Bali　Tel:0361-977984　●営業時間／ 8:00 ～ 21:30

Warung ◇ 味な店

Dewangga Warung

ニョマン・レンバッドの孫である旦那様のグズと、版画家の奥様メガが経営するデワンガ・バンガローは、ジャラン・デヴィ・シータの丁度真ん中あたりにあります。入口の小さな門を入ると、中はびっくりする程広い庭…。その庭の左手奥に、グズとメガのギャラリーがあります。メガの作品はインドネシアの神話に材をとったものが多く、魚や龍、神話に登場する動物たちが力強いタッチでいきいきと彫られ、ビビッドな彩色と金箔の仕上げが特徴。不思議なパワーが感じられる作品ばかりです。ぜひ一度御覧になってください。さてこのデワンガ・バンガロー、入口横でワルンをオープンしました。ワルン、と言っても中はとてもきれいで、まるで立派なレストランのよう…。席に着くと冷たいおしぼりを持って来てくれるところなど、個展のために何日か来日もしているメガさんのさすがの心配り。あっさりした白身の淡水魚グラミをかりかりにゴレンして、ソースをかけたグラミゴレンやツナなどの魚料理は満足の一品。チキンやポークのスウィートサワーソースやフーヨンハイ（メニューではオムレツとなっています）など、お馴染みの料理をとっても良心的な値段で提供しています。旦那様と知り合った美術大学時代をジョグジャで過ごしたという彼女の料理は、余り辛くなく、ジャワ料理にある優しい甘さが、どちらかと言えば特徴的。バンガローとワルンの切り盛り、版画製作、それからいたずら盛りのかわいい二人の息子さんのお世話に、毎日お忙しいとは思いますが、これからもメガさんの素敵な作品とお料理、どちらも楽しみに味わっていきたいと思います。今後が注目される“デワンガ・ワルン”です。



Jl.Dewi Sita, Ubud-Bali　Tel:0361-973302

私の常宿

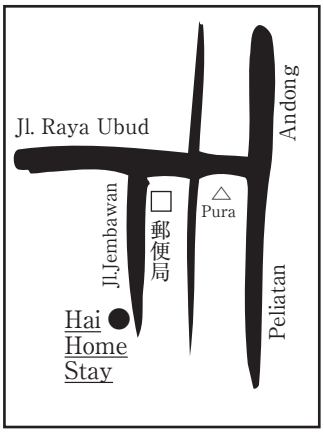
Pondok Manis

Hai Home Stay

ぴかりちゃん

Jl. Raya Ubud から郵便局のある通り、Jl.Jembawan を入り、Jl.Sugriwa へと抜ける曲がり角の 10m ほど手前に HAI HOMESTAY はある。ちいさな門をくぐると中庭が広がっていて、その中にバンガロータイプの客室が点々と並んでいる。家族が一緒に住んでいるので、セキュリティーの面でも安全。とはいっても、生活空間が切り離されているためしっかりとプライベートも保てる。それに表で雑貨屋も経営しているので、なにかと便利。

部屋のタイプは 3 種類。10,000 ルピアの部屋は水シャワーのみ。15,000 ルピアと 20,000 ルピアの部屋にはホットシャワーがついている。全室ツインルームで、ファン、テラス付き。もちろん朝食もついている。各タイプ 2 つずつの 6 部屋しかない小さな宿だが、オーナー若夫婦のきさくな人柄と、その過ごし易さから人気は絶大。それに裏通りにあるのでとても静か。のんびりと過ごしたい人にはもってこいの隠れ家なのだ。



住所 :Jl. Jembawan No,34 Ubud BALI　電話 : なし

旅人一声 Pesan & Kesan

河野由紀

Pasar の朝は早い。まだ暗いうちから人々が動き始める。私は朝の Pasar が好きで毎日のように通っていた。Pasar は朝と昼で顔が違う。朝は地元民の為、昼は観光客の為のお店が軒を連ねる。値段もモーニングプライスなるものが存在するのだ。早起きは三文の得というが、その言葉を肌で感じることができる瞬間である。Pasar は値段交渉がむずかしいのでわずらわしいという人も居るだろうが、食べ物関係はだいたい BALI 人と同じ価格で売ってくれる。相場がわからなければ BALI 人が払うのを見てから買う、というふうにすれば不愉快な思いをせずに買い物ができるだろう。かくいう私もはじめは交渉が苦手で、Pasar で知り合った日本人から情報提供をしてもらったり、BALI 人価格を見て払っていた一人なのだ。

毎日通うにつれて、仲良くなっていくおばちゃんの数も多くなってくる。やがて買う買わないにかかわらずあいさつや会話を交わすようになり、こちらが頼まなくてもおまけをしてくれたり、時には味見までさせてくれるようにまでなった。言葉はあまり通じなくても、笑顔と心で会話ができる“hati ke hati”の朝の Pasar に、私は旅の醍醐味を感じた。

■ブンブン・ゴビョグのルーツはタナ・トラジャか？

Vol.24 バリの舞踊で紹介したブンブン・ゴビョグ（竹筒を台座に撃ち付けてリズムをかなでる）が、なんとスラウェシ島の中部タナ・トラジャにもあった。「極通」スタッフがタナ・トラジャを旅行中遭遇した葬儀で、儀礼場で死者を迎える前に牛を生け贄にする儀式と、平行するようにブンブン・ゴビョグは行われた。バリでは今、芸能としてのみ残っているブンブン・ゴビョグだが、ここでは今だに儀礼として行われていた。

大きな舟型をした臼を６～８人の女性が両側から囲んで、唄いながら反対側の臼の内側面を撃ち付け、リズムをかなでる。死者は大勢の人の行列に付き添われ、トンコナン・ハウスと呼ばれる舟形の屋根がつけられた伝統的な高床式住居をかたちどったみこしに担がれて、儀礼場に入場する。この行列もバリの火葬式に似ている。しかしタナ・トラジャでは火葬はせず、岩をくりぬいた穴の中に納められるのだ。

バリとタナ・トラジャでは宗教が違い、もちろんそれにともなう宗教儀礼も同じものではない。しかし意外なところに共通点を見つけて、少々興奮してしまった極通スタッフなのだった。

■ UBUD の中国寺院は…？

ブラバトゥに向かう途中、クムヌ村はプタヌ川のほとりに、Pura Vihara Amurya Bhumi という仏教寺院があることをご存じですか？道からは見えないのでわかりにくいのですが、プタヌ川にかかる橋から下を見下ろすと、そこに中国寺院独特の赤い屋根、白い壁の色も鮮やかで、まだピカピカの寺院を見つけることができます。10 年前に建てられたばかりとか。

さて、5 月 11 日は Waisak という Hari Raya Budha（仏教の祭日）で、かの有名なジョグジャカルタのボロブドゥールでは大きな儀礼が行われました。この日、バリの Pura Vihara Amurya Bhumi でも小さな儀礼が行われたようです。「極通」スタッフが取材（?!）に訪れた時、ちょうど橋の上をバレガンジュールを先頭にガボガンを頭に載せた行列が通過して行きました。思わずついていきそうになりながらもその行列を見送りつつ、いざ、仏教寺院へと橋のわきにある階段を下りていくと、まず入口に“Selamat Datang”と書かれた幕が。それほど多くはないものの、参拝客の姿も見えます。おなじみのバリ・ヒンズーの寺院とは違い正装をしている人がいないのが、なんとなく不思議な感じ。バリだけどバリじゃないような光景。そうか、ここは仏教寺院だもんな…宗教が違えば様子も違うわけだ…とふと祭壇に目をやると…そこには見慣れたあのガボガンが！　それにもっとよく見ればチャナンも！金ピカに輝く仏像のまわりに行儀よく並べられているではないですか。…やっぱりここはバリなんだなぁ…と変に納得してしまった「極通」スタッフなのでした。

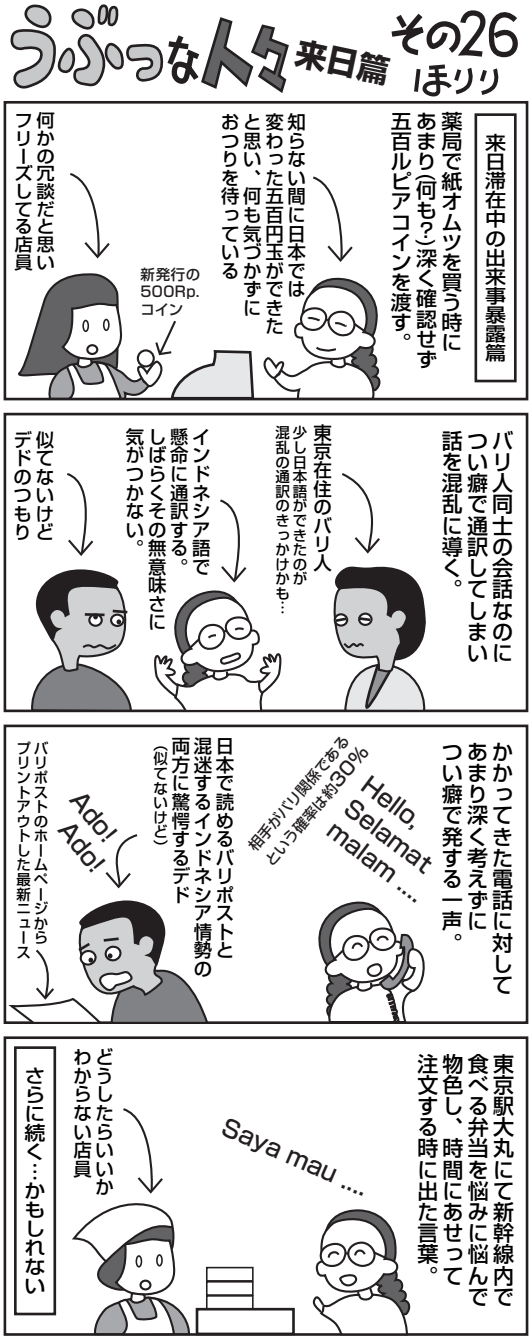
この仏教寺院は、平常時にも参拝可能。寺院の前の道は川へと続いていて、ちょっとした散歩道になっています。川では人々がマンディーしていたり、泳いだりしていてとてもローカルな雰囲気。是非一度訪れてみてください。

■おじさんは怒ってるゾ！

5月某日、インドネシアの国内事情が緊迫する中、バリ人はあいかわずオダランで忙しい日々を送っていた。オダラン風景を見る限り、バリは平和で穏やかな島だとつくづく思う。ところがそのオダランで嫌なものを見てしまった。と言うのは、芸能を観賞している日本人女性の態度があまりにもひどく、恥ずかしくて腰を抜かすところであった。この歳で腰を抜かしてしまったら一生治らないゾ！そんなことにでもなったら誰が私を看病してくれる！！

そんな不安が妙な怒りとなって沸騰してしまった。某村のオダランでの芸能は建物の中ではなく、屋外に作られた仮設の舞台。直接地面に座り込んで見る、もっともオダランらしい風情である。その座り込んで見る時の日本人女性のマナーがなっていない。男性はどうだったかと問われると、男性はあまり目立たないから気にかからない。バリの人々は普通、遠まきにすみのほうから座り始め、いきなり前に座ることをあまりしない。そのかわり、座りたい時は人の前に遠慮なしにどんどん割り込んでくる。そして、女性たちは女性たち、男性たちは男性たちとかたまって座る。そんなルールでもあるかのようである。バリの人々は、外国人旅行者に芸能がよく観られるように前の席を譲ってくれる。これはよりバリを理解してもらおうという彼らの考え方であろう。その好意に甘えるのはよしとして、そのマナーに問題がある。われわれはおじゃま虫、それでなくても外国人だから目立ってしまうのはしかたがないにしても、どう考えても目立ってしまう人、たとえば髪を赤だ緑だ黄色と染めている人。好きで染めているのはよいのだが、目障りでしょうがない。そして、両膝を立てて抱えているのはまだ可愛いのだが、なんと両足を投げ出して座っている人。不浄の足が寺院に向いているゾ！と思わず大声をあげてしまいそうになる。長い時間の観賞で足が痛くなるのはわかるが、そんなに我慢できないのなら人に見られないうしろに座れと、と言いたい。そして、夜遅くまで続くバリの芸能のため、寒くなってくるのはわかるのだが、上着をだらしなく羽織るのはやめてほしい。着るのならしっかりと着てくれと言いたい。

こんな格好をする日本人が一番前の特等席に横一列に6人も並んでいたらみっともないったらありゃしない。おまけに、たばこをすいにたびたび席を立つ奴。お～い、今いい場面なんだゾ！よくわからないのなら、遠慮してちょっとうしろから観賞しろ！あ～、久々に眉間の血管が切れそうになってしまったいかりやおじさんでありました。



【年間購読申込み方法】
エアメールで、その旨手紙をください。宛先は「影の出版会：伊藤」、住所は巻末のBALI本部です。料金は、4,000円。おりかえし申込み用紙と送金方法をお知らせします。また、お急ぎの方は、郵便振替用紙の通信欄に年間購読希望と書いて送金してください。振替先口座：00190-6-573859「影の出版会」です。

●おしらせ●

一時は「いったいどうなっちゃうの？」と心配したインドネシアの政変&混乱も、ようやく落ちついてきました。
テレビでは、学生デモの拠点となったジャカルタ・トリサクティ大学の、軍による発砲事件の裁判が、連日のように公開放送されています。

前号でもお知らせしたとうり、BALIはいたって平穏だったわけですが、5月中旬からバリに来るツーリストが激減してしまいました。つい最近まで、ヌサドゥアのホテルのほとんどが稼動率10%前後、何百も部屋数があるのに泊まっているお客さんは数人、なんていうのもザラで、クラブメッドはついに一時休業までしたほどです。
UBUDの小さなホームステイやレストラン、おみやげ屋さんも例外ではありません。「今日もウチはお客がゼロだったよー」なんて声が毎日のようにあちこちで聞かれます。6月も下旬にさしかかり、ちらほらUBUDにもツーリストの姿がもどってきましたが、このままこの状態が続くとたいへんです。大きなホテルの従業員などは強制的に一時解雇までされる人が増え、この物価高の折り、「どうやって生活していけばいいの？！」と途方に暮れている人も少なくありません。

だから ここで一発!!

悲痛な

極道スタッフは、たくさんのバリの人々の声を代表して、皆さんにお願いします!! 先日、日本の外務省からも、「バリは危険度1」と発表されましたが、バリ島は安全です!! レートも1¥=90～100Rpと、お・トクです。以前のように、バリに遊びに来て下さい!!

Ayo!! Silahkan datang ke BALI !!

でんごんばん

Pengumumaan

その一連の政変のあいだ、ちょうど日本に遊びに行っていた（「非国民！」の声）エナちゃんとデドっちから、皆さんへ、愛をこめて…

▶ ホリりさん、エリりさんはじめ多くの皆さん、日本滞在中はたいへんお世話になりました。なつかしい友んたちにも会え、そのうえバロンまで踊らせていただいて、心から喜んでいます。
一家三人、楽しく日本を満喫しました。それもこれも、皆さんのおかげです。
この場を借りて、御礼を申し上げます。

Terimakasih banyak banyak!!

Terima Kasih

発行人：伊藤博史

編集：伊藤博史 ／ 佐藤由美 ／中田 恵

桑野貴子／堀 祐一／菅原恵利子

エディトリアルデザイン：菅原恵利子

写真： 伊藤博史／堀 祐一

カバーイラスト：新井史緒

極楽通信「UBUD」Vol. 26

1998 年 6 月 20 日発行

発行・販売：影の出版会

Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha

Jl. Suweta No.16,Ubud. Bali,
80571, Indonesia tel.(0361)973134

©1998　影の出版会　禁無断掲載

影の出版会事務局

● BALI 本部　Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha Jl.Suweta No.16,
Ubud. Bali, 80571, Indonesia tel.(0361)973134

●日本連絡先　〒 143　東京都大田区山王 3-29-1 ブルク山王 302
ポトマック株式会社内 , tel.03(5743)7100 fax.03(5743)7101